

愛大コーホート研究 年収・教育歴と難聴有症率との関連

背景：私たちは、様々な生活習慣病の発症に影響するリスク要因や予防要因を明らかにし、生活習慣病の予防に役立てるための研究を実施しています。「愛大コーホート研究」は30歳以上の中高年を対象とした20年間追跡する前向きコーホート研究です。今回、八幡浜市と内子町で実施したベースライン調査（初年度の調査）のデータを活用して、年収・教育歴と難聴との関連を調べた結果を英文学術誌に学術論文として発表しましたので紹介いたします。

老人性難聴は中高年のありふれた健康問題であり、世界で数千万人が影響を受けています。生活の質が低下し、孤立化を引き起こすため、公衆衛生上、重大な問題であり、老人性難聴のリスク要因、予防要因の解明が待たれています。年収・教育歴との関連を調べた研究は世界的にも少なく、日本ではエビデンスがありません。

方法：現在、進行中の愛大コーホート研究に参加頂きました八幡浜市と内子町の方々のデータを使用し、36歳から84歳までの371名の男性と639名の女性を対象としました。世界保健機関（WHO）が採用している難聴の定義を使用し、500 Hz、1000 Hz、2000 Hz、4000 Hzの平均聴力値が聴力の良い方の耳で25dBを超えた場合、難聴と定義しました。家計の年収と教育歴については自記式質問調査票より情報を得ました。家計の年収は300万円未満、300万円以上500万円未満、500万円以上の3カテゴリーに分けました。教育歴は中学卒、高校卒、短大以上（短大、専門学校、大学卒）の3カテゴリーに分けました。年齢、喫煙、アルコール摂取、高血圧、脂質異常症、糖尿病、body mass indexを交絡要因として補正しました。

結果：難聴の有症率は、男性で31.5%、女性で20.8%でした。男性では、300万円未満の家計の年収に比較して、300万円以上500万円未満では、有意に難聴の有症率が低下しましたが、500万円以上では有意な関連を認めませんでした。女性では、300万円以上500万円未満、500万円以上のいずれの家計の年収においても、難聴との間に有意な関連は認めませんでした。男性女性とも教育歴と難聴との間に有意な関連は認めませんでした。

表. 家計の年収・教育歴と難聴有症率との関連

	男性		女性	
	難聴の有症率 (%)	補正オッズ比 (95%信頼区間)	難聴の有症率 (%)	補正オッズ比 (95%信頼区間)
家計の年収				
< 300	48/105 (45.7)	1.00	53/204 (26.0)	1.00
300- < 500	38/135 (28.2)	0.73 (0.54-0.999)	52/236 (22.0)	1.01 (0.74-1.39)
≥ 500	31/131 (23.7)	0.91 (0.64-1.30)	28/199 (14.1)	0.98 (0.65-1.48)
教育歴				
中学卒	21/42 (50.0)	1.00	24/61 (39.3)	1.00
高校卒	63/182 (34.6)	0.91 (0.64-1.29)	73/329 (22.2)	0.84 (0.57-1.24)
短大以上	33/147 (22.5)	0.85 (0.56-1.29)	36/249 (14.5)	0.85 (0.54-1.34)

※オッズ比とは関連の強さを表す指標のこと。オッズ比が1の場合、関連が全くありません。1より大きい場合、リスクが上がる方向を示します。1より小さい場合、リスクが下がる、つまり

予防的であることを示します。いずれの場合も、1より離れるほど、関連が強いことを示します。

結論：今回の研究では、世界で初めて、中間層の家計の年収が難聴の有症率低下と関連することを示しました。今回の結果を確認するためには今後のさらなる研究が必要です。

出典： Fukui J, Nobutoh C, Okada M, Takagi D, Tanaka K, Senba H, Teraoka M, Yamada H, Matsuura B, Hato N, Miyake Y. Association of household income and education with prevalence of hearing impairment in Japan. *Laryngoscope*. 2019 Sep;129(9):2153-2157. doi: 10.1002/lary.27758. Epub 2018 Dec 19. PMID: 30569557.